13　曲亭馬琴の医学観と医者との交流

加畑　聡子[1,2]，星野　卓之[1]，小田口　浩[1]，花輪　壽彦[1]
[1] 北里大学東洋医学総合研究所，[2] 二松學舍大学

【はじめに】

曲亭馬琴（滝沢解，1767–1848）は，読本作者として名高いが，医学に造詣が深いことでも知られている．『南総里見八犬伝』等の著作に医学用語が散見するのみならず，寛政元年（1789）年に官医山本宗英（1747–1835）の塾に入門し，代診を行うなど，自ら医療行為を実践していた．本発表では，馬琴が著した日記や書翰に記される馬琴の医学修得，医者との交流，受療行動を通して，その医療観を明らかにし，近世後期の江戸における医学の意義及び実態の検討を試みたい．

【医者との交流】

馬琴の長男，滝沢宗伯（1798–1835）は，『後の為の記』によれば，14歳の時から父と同じ山本宗英に従学した．山本宗英は幕府医官山本家の三代目で，母は江戸医学館の前身・躋寿館を創始した多紀元孝の女であり，江戸医学館世話役を務め，講義を担当した．また，『傷寒論』は鈴木良知（1761–1817，山城淀藩医），経絡と鍼術は小坂元祐（?–1815，丹波亀山藩医）などの官医より手厚い教育を受けるため藩医に学ばせたことが記されている．鈴木良知は躋寿館及び医学館で教鞭をとった目黒道琢（1724–1798）に師事し，小坂元祐は躋寿館の経穴学講師を務めた．馬琴・宗伯共に，医学館を中心として文献考証学の立場から漢方の客観的究明を試みた，いわゆる考証学派の礎を担った医者達から医学を教授されていたと言えよう．

【受療行動】

『後の為の記』『日記』書翰等には馬琴及び宗伯の受療行動が記録され，生来病弱であった宗伯の治療には，多紀安叔（元堅，1795–1857），豊田泰助，林玄曠・玄仲（1795–1878）父子，土岐村元立ら複数の医者があたっていたことがわかる．文政期には，林玄曠，多紀安叔，池田瑞仙（2代，1784–1857）のような幕府医官の治療を受けるも，効果が見られなければ断り，その上多紀安叔には効果が見られた自身の治療法「薫臍方」を教授していたことがわかる．その後には，「卜筮医師昌寿」（平野昌二）や「素人医師又兵衛」の治療を受けるなど，医者の身分を問わず，より効果的な治療法を模索する様子が窺える．また，林玄曠が養父・玄仲の代わりに度々往診するようになった際には，宗伯は「玄仲は古方者流なり」として度々往診を断り，馬琴も人柄を批判するなど，滝沢父子の古方派に対する批判的姿勢が見られる．森元長が処方した「キナキナ」と呼ばれる蘭薬を試すも服薬を中断し，元長を「庸医」と批判している様子から，馬琴の蘭方への不信感を窺うことができる．

【学問観】

馬琴は『異聞雑稿』の中で，奈須恒徳（1774–1841）が著した『本朝医談』について，漢方や蘭方ではなく日本の医療について記した有用な書として称賛し，当時の医学における蘭方への傾斜による「日本魂」の喪失の傾向を憂慮していた．一見，馬琴は日本の古学に偏重しているように見えるが，『独考論』では，和学や漢学への偏重を批判すると同時に，和漢を兼学し折衷した上で物事を選択することの重要性を説いており，比較的中立的な立場にあったことがわかる．

【信心の変化】

文政元（1818）年から3年かけて『玄同放言』のような考証学的書物を出版するなど，馬琴は従来，実証性を追究する学問姿勢にあったが，文政期には宗伯の不治の病に直面し，易学や方位学に信心を深めていく様子が『改過筆記』に記されている．晩年には天命を悟るようになり，人の生死には人力が及ばない範囲があり，老年になれば病が起きたら天命に任せ，命を楽しむことの重要性を説いている．実際に，天保5（1834）年に山本宗英に眼科名医・土生玄碩による治療を勧められるも，全快は期待できず無益であると断じて自療を選択する．このことは，医療では抗えない天命の存在を悟った馬琴の医療観の変化を表していると言えよう．